

## — 臨床 —

前下小脳動脈動脈瘤術後に嚥下障害を併発した若年者に対し  
リハビリテーションを行った1例梶田健史<sup>1</sup>, 中村由紀<sup>2</sup>, 井上 誠<sup>2</sup><sup>1</sup>新潟大学医歯学総合病院<sup>2</sup>新潟大学医歯学総合研究科 摂食環境制御学講座 摂食・嚥下リハビリテーション学分野

(主任: 井上 誠 教授)

Experience of dysphagia rehabilitation after the operation of aneurysm of the  
anterior inferior cerebellar artery -case report-Takeshi Nokita, Yuki Nakamura<sup>2</sup>, Makoto Inoue<sup>2</sup><sup>1</sup>Niigata University Medical and Dental Hospital<sup>2</sup>Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences Division of Dysphagia Rehabilitation

(Chief: Prof Makoto Inoue)

平成 23 年 10 月 14 日受付 平成 23 年 11 月 2 日受理

## 抄録

症例は 26 歳女性で食べ物喉に詰まる感じがして飲み込みづらいことを主訴とした。2008 年頃より眩暈を自覚するようになったが、2010 年頃より増悪し、2011 年 7 月に新潟大学医歯学総合病院脳神経外科にて左前下小脳動脈動脈瘤と診断された。7 月 28 日、全身麻酔下で手術（左前下小脳動脈離断術、脳動脈瘤摘出術）を施行された後より食塊の咽頭通過不全を主訴とする嚥下障害が出現したため、8 月 9 日に摂食・嚥下機能評価およびリハビリテーションを目的として同院摂食・嚥下機能回復部を受診した。初診時、舌は左側へのわずかな偏位を認め、さらに左側口唇および頬には明らかな運動障害を認めた。また、発声時の軟口蓋挙上は可能であったが、左側の挙上不良で、開鼻声を認め、発声持続時間は 6 秒であった。嚥下内視鏡検査時に左側披裂および声門の運動不良が観察され、声門閉鎖は不完全であったことから、左側顔面神経麻痺、迷走神経、舌咽神経、軽度の舌下神経障害を伴う嚥下障害と診断して、間接訓練および食事時の嚥下方法として、顎引き嚥下および回旋嚥下を指導した。訓練開始後 8 日目の再評価時、すべての機能に改善を認め、術後 24 日目に経過良好で自宅退院となった。一般的に前下小脳動脈動脈瘤術後の予後は良好とされるが、初診時に認められた脳神経系の運動不全に関する診断に基づいた患者教育や食事指導、間接訓練の提供などによって、良好な予後に貢献できたと考えられた。

## キーワード：

前下小脳動脈、小脳動脈瘤、嚥下障害、摂食・嚥下リハビリテーション

## Abstract

A 26-years-old woman had pharyngeal residues of boluses. She had a history of operation of aneurysm of the anterior inferior cerebellar artery. After the operation, dysphagia described above occurred. In the first clinical assessment, she had weak and moderate palsy of tongue and facial muscles on the left side, respectively. In the videoendoscopic examination, impairments of elevation of soft palate, arytenoideus and vocal cord were revealed on the left side as well as rhinolalia aperta, shortened phonation time (6 sec). At that time, she had no limitation of diet. Postural compensation including head and neck rotation and chin tuck swallowing was indicated to improve swallowing efficacy and indirect therapy was performed by dentists and dental hygienists. Eight days later, most scores were improved. Although it was reported that prognosis of post operation of operation of the

anterior inferior cerebellar artery was good, the present case demonstrated that clinical approaches including indirect therapy and education for patients resulted in a good risk.

Key words :

anterior inferior cerebellar artery, cerebral aneurysm, dysphagia, dysphagia rehabilitation

## 【緒 言】

前下小脳動脈に発生する動脈瘤は全脳動脈瘤の1%以下といわれる<sup>1,4)</sup>。前下小脳動脈は解剖学的位置関係より顔面神経・聴神経に近接しており、顔面神経・聴神経障害を呈することが多いとされている。今回われわれは、左前下小脳動脈動脈瘤の術後に嚥下障害を併発した若年者に対しリハビリテーションを行い、嚥下障害が改善した1例を経験したのでその概要について報告する。

## 【症 例】

患 者：26歳，女性

初 診：2011年8月9日

摂食に関する主訴：食べ物が喉に詰まる感じがして飲み込みづらい。

原因疾患：左前下小脳動脈動脈瘤

既往歴：特記事項なし

現病歴：2008年頃より眩暈を自覚するようになったが、すぐに消失するものであり頻度も年に数度ほどであったためにそのままにしていた。2010年頃より眩暈の頻度、程度ともに増悪した。2011年5月30日にこれまでにない強い回転性眩暈の発作が出現したため、在住市内の総合病院神経内科を受診し、同日より4日間入院となった。安静と鎮暈剤にて症状改善したが、同院で施行された頭部MRIにて左前下小脳動脈に8mmの腫瘤を指摘され、7月4日に同部精査目的にて新潟大学医歯学総合病院脳神経外科を受診した。7月20日に同科入院後に脳血管造影CTを施行され、左前下小脳動脈動脈瘤と診断された。また、この血管造影施行後、体幹に発疹が出現した。7月28日全身麻酔下で手術（左前下小脳動脈離断術、脳動脈瘤摘出術）を施行された。術後より食塊の咽頭通過不全を主訴とする嚥下障害が出現したため、8月9日に摂食・嚥下機能評価およびリハビリテーションを希望して同院摂食・嚥下機能回復部を受診した。

経過：

〔初診時〕初診時の食事摂取状況は、粥食を50分程度かけて摂取しており、摂取量は5割程度であった。ペットボトルからの飲水時にむせを数回認めていた。四肢の運動・感覚機能に特記すべき異常は認められなかった。顎顔面口腔の運動機能では、安静時および挺舌時に左側へ

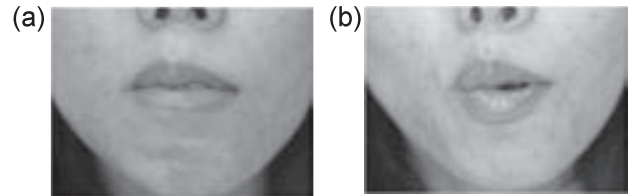


図1 初診時に認められた顔面麻痺  
(a) 口唇閉鎖時 (b) 頬吸引時

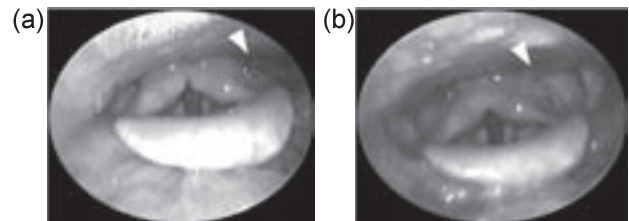


図2 嚥下内視鏡検査画像（リハビリテーション介入前）  
嚥下後、左側梨状窩に各検査食の残留（矢頭）が認められた。  
(a) ゼリー嚥下後 (b) 粥嚥下後

のわずかな偏位を認め、さらに左側の口唇および頬には明らかな運動障害を認めた（図1）。感覚機能に特記すべき異常は認めなかった。軟口蓋反射および咽頭絞扼反射ともに減弱していた。構音機能に関して、発声時の軟口蓋拳上は可能であったが、右側に比して左側の拳上が不良で口蓋垂が若干右側へ牽引された。さらに開鼻声を認めた。発声持続時間は6秒と短く、反復唾液嚥下テスト（repetitive saliva swallowing test：以下RSST）は9回、改訂水飲みテストは5点の評価だったが、3ccの水飲み施行にて複数回嚥下を要した。初診の翌日（8月10日）に実施した嚥下内視鏡検査では、左側披裂および声門の運動不良が観察され、声門閉鎖は不完全であった。液体のストロー摂取時には嚥下中に喉頭侵入を疑うむせを認めており、またいずれの施行においても嚥下後食塊が左側梨状窩に残留する様子が観察された（図2）。咽頭残留は、顎引きでの複数回嚥下および回旋嚥下をすることで通過が促された。評価にあたっては嚥下造影検査も予定していたが、検査前日の夕方より原因不明の発疹が出現したため中止とした。血管造影に対する発疹の既往も考慮して、今回の評価に当たって嚥下造影検査は実施しないこととした。

〔診断および方針〕初診時の嚥下機能評価検査および嚥